

## 道

大川内 茂

道は九十九折の坂を過ぎる頃から大分樂になつて來た。二間幅の白い道が蛇のやうにうねうねと曲つて馬車はガラガラと景氣のいゝ音を立て、進んで行つた。夏の少し涼しくなりかけた午後の空がすつきりと晴れてともすると木の間から二時間前に通つて來た千々岩村の白い濱邊が見るのであつた。

先つきの茶屋で憩つた時、馬車を下りた駿作は、今迄狭い馬車の中にあるた身体のはばりにもうたまらなくなつて馬車について歩いて行くことになつた。比較的平坦な道なので、彼は裸足になつて下駄を腰にぶら下げた。

道はS字形にだん／＼緩な傾斜をなして上つてゐる。小さい叢の中の間道を抜けて上の道に出ると、駿作は路傍の岩に憩ひ乍ら馬車の上つて來るのを待つてゐた。

日も大分傾いて千々岩村はもう見になかつた。大きな山の峰々がうすい靄に包まれて、黙つて聳<sup>た</sup>つてゐる。その影が長く尾を引ひて丘又丘を越へてゐた。突出した崖の端に立つと、ちよう／＼長崎の山々に入りかゝる夕日が千々岩灘を眞赤に染めてゐた。駿作が見されてゐる中に馬車が追付く。

崖と崖と差迫つた間の小さい峠を越すと大きな盆地が、展がつて青い稻田が一面に風に靡いてゐた。田は山の裾まで走つて、すつと先では姉さん被りの女が四五人小さく動いてゐる。盆地の上の雲一つない空が、だ

んく、暮れてゆくのがよく分つた。

「お——い」

駿作が大きな聲で吐鳴ると田の人たちは急に腰を伸ばして此方を見てゐるやうである。二重にも三重にも木霊してゆく自分の聲に駿作はびつくりした。

路の直ぐ右手は山裾で、いきなり急な傾斜になつてゐた。笹など茂つてゐる叢の中から小さい流が音を立てゝゐた。水がまるで血と思はれる程眞赤に染つてゐる。温泉ももう直ぐだナと思ひ乍ら彼は小一時間も歩いて來た。

盆地を抜ける頃からあたりの丘がざら／＼の白い砂になつて、谷に一直線の傾斜をなして崩れてゐる。その下の小さい川には今度は青い／＼水が流れてゐた。丘の上には美しい松が並んでゐた。風の所爲か一体に丈が低くて白い丘と落付いた色の對照が出來てゐた。そしてその白い砂の此處彼處から小さい湯氣が昇つてゐるのである。プツ／＼と快い音が耳に觸れる。いよ／＼温泉宿が近いと知る駿作の足は速くなつた。

路が一つ廻ると宿屋の屋根が一度にバツと目に映つた。ホツとした駿作はぐつたりなつた身体を路傍の白い岩の上に置いて仰向けになり乍ら大分遅れた馬車を待つてゐた。

學校を止すことになつて突然家に歸つた時にも故郷は彼の安息の地ではなかつた。

友の情厚い慰藉の言葉に送られて彼はK市を去つた。そして當然安息と平和の巢であるべき故郷には彼の挫折に痛んだ父の淋しい顔が待つてゐた。心の弱い彼にはかうした父の痛まじさが堪へられなかつた。取返し

のつかない大きな罪でも犯したやうな不安がどうしても彼を故里に落付かせなかつた。しかも突然の歸省に近所の人々の理解と同情とを欠いたとやかくの噂が事實以上に彼の耳に入つて、彼の心はいやが上にもいらだつてしまつた。逃げるやうにして彼が小さいバスケットに二三冊の本と着物をぶち込んでS市の叔父の家に走つたのは三日とたぬ後であつた。そして休に入る従弟を待つて叔母と駿作と従弟たち四人が此温泉嶽に上つた。

一ヶ月以上もの心と身との烈しい苦闘に彼はへたくすになつてゐた。

安息の地！彼は今迄衣てゐた現世の赤い衣をぬいで靜に青い休息の褥に入らうとしてゐた。

馬の蹄と車の轍の音が直ぐ目下に響いた。

「駿さん、ここにゐて、もう直ぐだよ」

叔母に促された彼は立上つて岩を飛下りるなり又路を上つて行つた。

温泉宿にはもう灯がついて暗くなつた邊一面に眞白い湯氣がくつきり浮んでゐた。なめらかな湯の香が漂うて、初めて見舞ふ湯宿に何となしのなつかしさがこみ上げて來た。

先頭に立つた彼の後から一行を乗せた馬車が仰山らしい音を立て、町に入つた。

殆んど三千尺余りの此高原は、町といつても湯客のために二十軒と足らぬ旅館と、外國人のためのホテルがこゝかしこ立つてゐるに過ぎなかつた。しかし公會堂もあれば氣の利いた雜貨商も開業してゐた。駿作の連中が豫め知らしてあつた上田屋といふ宿屋に着いた時にはもうどつぶり日は暮れてゐた。

「まあ、よかつたね。もつと遅くなると思つてゐたのに。」

「ほんとですね。何しろ、愛野を出る時が二時だつたのですから、早くとも八時頃にはなるだらうと思つてゐました」

旅の疲れと空腹とのために殆んど根氣が抜けてしまつた駿作は、暫らくは前に出された食膳に手も出せなかつた。

「こんな所に押籠められちや、出られつこありませんね。これで湯でもなかつたら、ほんとに俊寛の流島だ」突然箸を措いた兄の方の俊夫が如何にもつまらなさうに云つた。

「いゝね、こんな處がいゝのですよ。勉強するには何よりです。涼しくもあるし、静かでもあるし………ほんとに別天地ぢやありませんか。暑がりの父さんなんか一度來たら居座りですよ………」

「だつて、活動もなくてやり切れないナ。とてもこんな淋しい所では暮されやしない。命が縮まりさうだ」弟の佑二はかうした山間で一ヶ月も淋しい生活をするのが不安でならないらしかつた。

「まあ、そんな贅澤は止さう。僕達には有難過ぎるよ。下にでもゐて見給へ、今頃は涼しくても八十度は大丈夫あるね。涼しいのと静かでさへあれば結構だよ………」

かう云ひ乍ら静に箸をとつてゐた駿作の耳に晝、坂路で聞いたあの鳥の音が又聞れて來た。彼等の居間は二階の八疊で下の路では湯に行く人たちの話聲が浮いた下駄の音ともに響いて來る。

かうした静さの中に浸つてゐると駿作は又淋しい氣に誘はれて、恵まれた此仙境、興へられた此平和、求めてゐたすべてが興へられ乍ら、彼の心には尙或物足らなさが湧くのであつた。

煩はしい下界の葛藤から脱れて、さてかうして静に身を置くと、忘れやう忘れやうとしてゐる過去の忌はしい追憶が、却つて今までよりもはつきりとした姿になつて表はれて来る。何處まで行つたらあの醜い過去の凝視が俺を見離してくれるだらうと考へると、駿作は救はれさうもない自分の身が悲しいものにさへも思はれるのであつた。

女中が膳を引くと暫らくして四人は手拭と石鹼を持つて外に出た。奇麗に晴れた夜で星が瞬いてゐる。大佛堂の前を過ぎると直ぐ地獄になつてゐて、物凄いい呻をたてゝたぎる熱湯から、白い煙が濛々と立つてゐる。富貴ホテルの窓から洩るゝ赤い灯が煙に一條くつきり映つて、のしかゝるやうな白い塊に思はず彼はたじろいた。

「凄いな、恐ろしい位だ。夜なんか一人で歩けないね……」

實際駿作は心細くなつた。路の右手は丘になつてゐてその中腹には、小さいお地藏さんが幾らも並んでゐた。小さい電燈が一個點火してゐた。

「こゝなんですよ、賽の河原つてね。澤山お地藏さんが並んでるだらう、小石を積重ねたのもある筈だが……」

かういつて、叔母はほの闇い電燈の光に首をかしげて小石原を覗き込んだ。成程、角ばつた石をうまく積重ねてお地藏さんが出来てゐる。

ホテルを二つ三つ通り過ぎて突當ると、大きなアリアケホテルの前に出た。左の方に行くとな新湯である。ホテルの玄関では四五人のロシア人が大きな藤椅子により乍ら夕食後の涼を納れてゐる。ぶんぐりと太つた中

年の婦人が小さい團扇を使ひながら四人の通るのをいぶかしげに眺めてゐた。

新湯の入口をくぐると叔母は右に折れて、駿作達は左に入つて行つた。丸木を組合せたやうな荒造の小屋に石を疊んで圍つた四坪ばかりの湯漕があつて、石壁の上の小さい竹筒から新しい湯が小さい瀧をなしてトロトロ落ちてゐる。

浴客は三人だけである。ひつそりした湯漕に落ちる瀧が快い音をたてる。

「あゝ、きつかつたね、あの九十九折坂を越す時は馬車が馬鹿にゆれて、谷に落ちさうでこわかつた……」  
「だから、歩けばよかつたのだよ。あんな楽な道だつたじゃないかい」

瀧に頭を打たしてゐた駿作は眼をつむりながら、小さい従弟に詰るやうにつぶやいた。

「それよりも僕は、あの愛野で食つた飯が美味くつてね。それだけでも食へさうだつた」

「朝あんまりうろたへて飯が咽喉に入らなかつたんだらう……しかし静かでないな。そろそろ眠くなつて来た」

「駿さん！石鹼は……」

俊夫が勢よく湯漕を飛出した。

「戸棚だらう……」

じつと腕を伸ばして頭に當る水の快い觸覺に彼はすべてを忘れて湯に浸つてゐた。

山は無言ではあるが凡てを歌つてゐた。そして天使の伴奏の如き驚嘆すべき調にあはして、云ひ現はさんとして云ひ現はし得ざる閃きを、最上の云ひ難きラプチュアにまで高めてゆく。しかも此甘美な耽溺は長きを

許さなかつた。彼が己の現實にあることを意識した時、又言ひやうのない淋しさに襲はれるのである。それは過去の苦い憶ひが此時彼の胸に蘇つて決るからである。

失はれた愛——去りゆく女——彼は此時恐ろしい淋しさ、死の如き空虚さを沁々と感じないわけにゆかなかつた。

宿に歸ると四人の床が部屋一杯にのべてあつた。

山の生活の第一日が明けた。

朝湯を使つて歸る頃、町を蔽うた山影がだんだん縮つて行つて、あたり一面の濃い霧が山裾を走つてゆくのが手にとるやうに見ゆるのであつた。尻の切れた草履をはいた小童が手を追つて、露に濡れた野路を辿つてゆく。

ぼ—つとした氣分でコーヒ—をすゝると、湯疲れと昨日のくたぶれで大分ものうい。

明年高等學校を受験する俊夫は昨晩定めておいた日課通りに、時から數學をやり始めた。駿作はカバンの中から英譯の「罪と罰」を取出してコツ／＼字引を繰り出した。

少くとも涼しい朝と夜は勉強するといふことが彼等の日課にしてあつた。晝飯を済ますと大抵俊夫は佑二を伴うて、地獄の邊から公會堂に廻り、テニスコートを通つて小さい此の公園を一巡することにした。

駿作は好んで牧場に行つた。そしてよく、温い午後一杯を草原で寝轉んで暮した。

單調ではあるが何ものにも煩はされぬ平穩な生活であつた。

夕方になると、ホテルの窓に赤い灯がついて、山にはもう粉のやうな霧が襲うて來るのである。すると露に濡れた湯宿の軒燈が、泣きはらした乙女の眼のやうに瞬くのさへ駿作にはうら悲しかつた。大抵大きな中年の男を中にしたロシアの女たちが、聲高に笑ひ興じながら下の路を通つてゆく。四人は顔を見合せてはその妙なアクセントを笑つた。

四人の生活が單調に苦しみ初めてゐた時であつた。叔母は家の事に急に一週間余りも山を下ることになつた。爽やかな朝霧の中に、叔母の馬車は吸はれるやうに消へて行つた時、駿作は、まるで小供のやうな心細さを覺わたのである。

「これからは自治寮だ、一つ今晚はコムバでもやつて騒がう」  
淋しさを紛らすやうに駿作が云つた。

「鬼のゐない間の命の洗濯だ、今日は特別日として勉強はよさう」

兄や従兄のお伴に苦しい復習を強ひられてゐる佑二は、かう云つて駿作の顔を伺つた。

「うん、今日は休みだ、駿さん、僕テニスに行くよ」

俊夫が經木の帽子をひつたくつて外に出ると駿作も佑二も後についた。

ロシアの少女が二人、日本の若い男と硬球をうつてゐる。

「ホーテイ、ラブ……」



「サーテイ、ラブ……」

奇麗なアケセントが少女の唇をついて出る。供へつけのベンチの上で俊夫は身じろきもしないでカウントを覺てゐるらしい。

同じベンチの上に腰を下してゐた英國の少女が、小さい子供たちを見張りながら「海の彼方へ」を歌つてゐた。我知らず駿作が口笛でそれに合はすると、驚いたやうな少女の青い瞳が彼の顔をのぞき込んだ。

叔母が山を去つてからは、さらでだに單調と無味とに苦んでゐた彼等の歩が更に鈍くなつて來た。いろ／＼の口實に托して従弟達はよく遊びに出かけた。今迄行かなかつた公會堂にも舞踏を見に行くと言つて夜の課業を廢めてしまつた。晝はテニスコートに入り浸りであつた。俊夫は少しく口馴れて來た英語の會話が面白いのと、元來が好きなテニスのことを考へると、とてもじつと宿にゐて字書の頁を繰る氣になれなかつた。かうした山間で金を使ふやうな場所はなかつたものゝ、いはば彼等の監督の地位にあつた駿作は、此だらけ初めて來た生活を恐れた。それに残してあつた金もだん／＼減つてゐた。殊に知合になつた英國人が山を下る時、葡萄酒を買つて贈つたりしたので、もう財布には幾らも残つてゐなかつた。駿作は大人氣もなくだん／＼あせつて來た。

その頃山は大きな霧が襲つた。地獄の白い湯煙りと、押付られるやうな濃霧との區別がつかぬ程であつた。蹄の音が遠くで聞えてゐると思ふと、霧の中からポツカリ馬車が飛出してぶつつかりさうであつた。恐ろしくつてとても崖路は歩けなかつた。霧をすかして太陽が白く中空に懸つてゐた。うす暗い室で本を讀むこと

は一通りの骨折であつた。駿作にはこんな霧は未だかつて経験されたことのないものであつた。一日遅れの長崎の新聞では、下に大雨で諫早附近の鐵橋も墜ちたといふことである。叔母の歸りは又延びた。下の路で馬車の轍の音がする度に三人は机を離れて表縁に出て行つた。

「未だむつかしい」

と云ひ乍らも轍の音が聞けると、とてもだまつてゐることが出来なかつた。期待したそれが他の人であつた時、彼等の消氣方は氣の毒な位であつた。

しかしこんな霧にも拘らず、登山者はひつきりなしに續いた。霧の中から浮出たやうにあらはれて來る人々が、翌朝になると又深い霧の中に消れて行つた。これが駿作には神祕的にさへ思はれて、此にかうして黙つて見てゐる自分が、時ど所を離れた仙境に靜かに人間の去來を眺てゐる、ある高い者でもあるやうな氣がされた。爲すこともなく叔母の歸りを待つてゐる今の彼には殊にかうした感が著しかつた。

S市を朝立つと、山には夕方の六時頃着くことになつてゐた。夕食後は三人で温泉の下まで下りて行つて、遙に下に續いてゐる白い道を辿つて、それらしい馬車の影を求むるのであつた。しかも期待は惡戯な程裏切られた。もう今度來なかつたら、いよゝ電報打つばかりだと腹を立てては又一日空しい焦燥と不安の裡に暮らした。そして、叔母が山を下りてから十日にもなつてゐた。

朝の仕事が初つたのはもう九時を過ぎてゐた。三人が各々の仕事にいそしみ出した。夜明けの霧がだん／＼晴れてゆくと、今日も亦向の普賢岳が紫に彩られてゐた。ミン／＼蟬が鳴き出した。

ト、ト、ト、ト……坂を上る馬の蹄の音に交つてゴロ／＼と軋る轍の音が響いて來た。三人は期せずしてハツと面を上げた。佑二が眞先になつて縁の手欄に飛出した。俊作も俊夫も下を眺めた。

幌を深くした馬車が靜かに揺れながら坂を上つて來る。幌には小濱と染め抜いてあつた。小濱には長崎の従姉が來てゐるので、叔母はあちらに廻つたのだと俊作は考へた。幌の隙から女らしい姿が彼の眼にとまつた。

「おい、今度は大丈夫だせ！」

嬉しさにわく／＼した聲で俊作は確むるやうにかう云つた。

「さうですね、ほんとにけしからん、こんなに待たすなんて氣が利かないや。うんと一つとつちめてやらう」俊夫が十日の鬱憤を一時に晴らすかのやうに意氣込んで彼に答へた。

宿の前に車が停つた。じつと見入つてゐる三人は今馬車から出る叔母の顔を待ちもうけてゐた。

美しい黄と黒の立縞の着物を衣て幅の廣いシヨオルを肩にかけた美しい女が、オペラバックを提げて車から出て來た。

今まで、にぶい綠色に包まれてゐた邊の靜寂な、落付いた色彩の調和が目茶苦茶に壊されてしまつた。グラグラグラと大きな空氣の渦巻が起つて、俊作は思はず胸をつかれたやうな息苦しさを覺れた。

「な——んだ、またか、いよ／＼電報だ！」

従弟たちはありつたけの不平を並べて、それでも室に入らずにその女を見てゐた。向のよろづやのバルコニーに出てゐる人々の顔が一齊に此方に向けられてゐる。

「お早いおつきで……杉や、あの二階の二番に御案内申上げて……」

宿のお神さんが、ひつきりなしに御愛想を並べ初めた。

「御世話になります……」

玄關に入つた彼女はかういふと、女中に案内されて、今朝空いたばかりの駿作たちの隣の間に入つた。今迄手欄によつてたる彼等は、彼女が自分たちの直ぐ隣室に入つたことを知ると、あはて、自分の部屋に入り込んでしまつた。彼女の汗になつた着物を乾す氣配がする。

「ほんとに母<sup>かあ</sup>さんはいけないや、どうしてこんなに遅いんだらう………もう僕一層歸らうか知らん」

幾分年の少い佑二は、如何にも泣き出したいやうな顔をした。

「さうだね、もう今夜あたり電報打たう。どうせお金もないし——もし叔母さんが出られなかつたらお金だけでも送つて貰ふやうにしやう……」

かう云つて駿作はなだめながらも、彼自身亦更に腹立たしいもどかしさを感じないわけにゆかなかつた。しかし今隣の間の女のことが妙に氣にかゝつて仕様がなかつた。

蜂のやうな鋭い色彩の着物、それに女優とまで思はれる髪の毛の結振りなどから推して、とても普通の女とは思へなかつたものゝ、駿作の心には決して嫌悪といつたやうな感は少しも起らないのみか、寧ろ待ちもうけてゐた者が今やつて來た時のやうな或嬉しさに急に心が軽くなつた。

机についても、じつと耳をこらして隣りの間の氣配を窺つた。やさしい衣褶れの音がする度に、彼の心には大きな波紋が起された。

「あの、お湯も直ぐ近くで御座いますが——お召しになつたら如何で御座いますか……」

茶器を運んで来た女中がかう訊いた。

「それではお湯にいたしませう。その前一寸お手すきだつたらお神さんを呼んで頂けませんでせうか」

「承知いたしました」

女中が階段を下りて行くと、すぐお神さんが入つて行つた。

「今日はさぞお疲れでございまして……何しろ先日の雨で路が悪うございまして……して何ぞ御用でも……」

「實は、少し長く御厄介になるつもりで御座いますが——一ヶ月ばかり。それで食事などもその積りでやつて戴けるでせう……」

控へ目勝な彼女の聲がする。

「はい、もう、それは何でございまして、長く御入湯のお方には特別に割引をいたしてゐるので御座いますが……よろしう御座います。心得ました。何分不行届勝ちで、よろしくお頼申上げます」

お神さんが出てゆく後から彼女は温泉の事なぞ聞きながら湯に出て行つた。

ほつとしたやうに駿作は又本をとり上げた。

電報に驚いたらしい叔母はその翌日の夕方上つて来た。従弟たちの小言は一頻り猛烈かつた。駿作はそれでも叔母が来てくれた安心に不平も云へなかつた。だから切つた生活が叔母の来たために、又緊張すれば有難いと思つた。

「駿さん、濟まなかつたね、何しろ、あの大雨でね。それに洗濯物の指圖なぞしてゐると、とても十日や二十日ではさげさうもなくてのび〜になつたのだよ……………昨日の電報にはびつくりしてね、あはて、家を出て来ました」

「しかし叔母さんはひどい、も四五日後れたら湯錢もなかつたんですよ。金のないのが一番心細い…………」

「まあ、今度は私が悪かつた。……………隣りにはごなたかお出でのやうね。前の方はもうお立ちになつたの」

「嫌な奴が来てますよ。ハイカラでね。癪に障る」

駿作は、かうした女が来たゝめに、此山の靈地が汚されてもするやうに突慳貧に答へた。

「そしてね、一人だからおかしいのですよ。病氣かも分りませんね。大きい行李が二つもあるんです…………」

「後で連れの方がいらつしやるのだらう、しかし私もお話相手が出来て恰度よかつた」

「……………」

駿作は隣の女から離れやうとして離れること出来ぬ自分の心をいぶかつた。人なつこい叔母は、かうして男の子ばかりの相手の所に、格好な話相手が出来たのを喜んでゐるらしい。駿作は隣の女と叔母との間に初まる交渉、引いては自分たちの間のかゝはり、に少からず興味が湧くのであつた。

翌日午後、湯から歸つて来る叔母は隣の女と連立つてゐた。部屋の前で二人は挨拶して別れた。

室に入つた叔母に、ちようど寝轉んで雑誌を讀んでゐた駿作は話しかけた。

「長かつたですね、あんまり長いと逆氣のほせますよ」

「しかし、よく入れたもんだな、僕なんかとても三時間なんて入れやしない。母さん、一体湯の中でどうして

るの」

寫眞の枠を切つてゐた佑二が、顔も向けずに詰るやうに問うた。温かい午後の日がカーテン一杯に當つて、室の中は明るく、乾き切つてゐた。心持ち上氣した顔を撫でながら叔母は鏡台の前に坐つてゐる。

「入つたり、出たりしてゐると直ぐですよ、それに近所のお婆さんと話してゐると、三時間位経つのはわけはない……」

「女はやつぱり口が多いからな」

駿作は雑誌を伏せて、手を組んだま、仰向けになつた。

「それにね、お隣りのお方と一詣になつて……」

叔母は聲をひそめた。駿作はじつと天井を見つめてゐる。

「何でもリユーマチスで一ヶ月ばかりも滞在なさるつて……此湯は鐵と硫黄と明礬があるからリユーマチスにはよく効くさうね」

「一体どういふ人ですか」

かう聞いてから駿作は少し恥しくなつた。

「長崎の人らしいよ。東京の方で女優してゐるつて言はれたが……」

「女優ですつて……なるほど道理で……」

駿作はさも侮蔑し切つたやうな、嫌な顔をした。そして或期待を裏切られたやうな腹立たしさを覺えた。

「しかしね、英語なんかも出来るらしいのよ。長崎の華水を出たつて……」

「ホー、さうですか、それじゃ、英語はうまいでせう。あの學校はミツシヨン、スクールですから……英語に殊にうまいと聞いてゐましたが……出てから女優になつたんですか？」

「さうらしいね、博多で開演してゐる時、リニュー・マチスに雇つてこちらに來たつて言つてらつしやつたよ」

今迄知らなかつた好奇心が駿作にはムラ／＼と起つた。侮蔑し切つた彼の心が急に、意氣地なく和らいで行つた。そして修道院とまで思つて、ある憧憬を抱いてゐた、あの女學校の生徒が女優になるなんて、駿作には一種の驚異であつた。そしてかうした高原の温泉宿で會つた、彼と彼女との、いはば運命が彼には戲曲的にさへも思はれて、彼の心に彼女に對する或親しみが湧いてゆくのがはつきり分かつた。

「佑二君、牧場に行かう」

急に思ひついた様に云うと、駿作は帽子をとつて部屋を出た。後についていた従弟も構はずに、彼は大空を仰ぎ乍ら、高い聲で讚美歌を歌つて、牧場に續く崖路を辿つて行つた。

公園といふのは、死火山の噴火孔のやうになつて、五十尺余りの低い丘が、圓形狀の盆地を圍んでゐた。夕食を済ますと駿作は、湯歸りをそのまゝ一人公園の方に向つた。従弟と叔母は公會堂で外國人たちのダンスを見にゆくと言つて駿作よりも一足速く出てゐた。賽の河原の側から丘を上ると、小さい松林の間を抜けて、丘の頂きに出ることになつてゐた。そして一番高い丘の上には、夕涼のために小さい亭が設けてあつた。何時も夕方になると外國人に占領される此亭も、今夜は舞踏會といふので誰も涼んでゐる人はなかつた。



駿作は一人、亭に腰を下した。

丘に圍まれた公園の内部は、茶碗のやうに凹んで、真白い小石原であつた。その中を二尺幅の道が殆んど十字形に走つてゐる。もとは地獄が湧いてゐたさうであるが、今は只一面の燒野原となつてゐた。向の丘を越して公會堂の上半身が覗いてゐる。青と赤と錯交した電氣の光がその上空を一面に明るくしてゐた。ずつと下のテニスコートの側の路を通るロシア人の疝高い聲が此丘の上で聞えて来る。

涼しい風が足下をくぐつて行くと、松のかすかに搖れる音がする。駿作はボンヤリ西の空を眺めてゐた。軽い草履の音がすると、湯上りの化粧の香がむせるやうに彼の鼻をついた。

「あら、あなたここにゐらして……」

不意を打たれた駿作が、あはて、後を振向くと、團扇を持つた彼女が側に立つてゐる。

「あ、あなただつたのですか、びつくりしました……」

「公會堂にはいらつしやらなくて」

「暑いからよしました。」

「昨晚は失禮いたしました、お今朝眠かつたでせう、わたし今日はお晝まで寝てしまつたのよ」

叔母と彼女とが親しくなりかけたのは、つい四五日前からのことであつた。お湯で一諸になつたりした機みで、お互に往來するやうになつた。それも叔母の注意からかして朝丈は來なかつたが、午后になると叔母を誘つて湯に出かけた。従つて駿作とも言葉を交すやうになつてゐたが、今まで二人きりで話すといふことはまるでなかつた。しかし彼女に會はない日には駿作は淋しい氣がしてゐた。昨夜は彼女の部屋で晩くまで五

大連れで ترامプをして遊んだのである。思つてゐた程嫌な女ではなかつたが、それでも駿作は彼女に打解け切れなかつた。事實、彼はかうした、自分と同年配の女と、どう話していゝものか分らなかつた。憶病な彼はとても進んで彼女に話しかける勇氣もなかつたし、又機會もなかつた。

そして、かうして彼女が突然と彼一人の所にやつて來た時には、彼は何者に對するとも知らぬ妙な後暗さと不安さを感じて、一分間もじつとしてゐられさうになかつた。上ずつた彼の聲には明に狼狽の氣味があらはれてゐた。

「いゝね、僕こそ。それでも僕たちは勉強しなくちやならぬから、やつぱり朝は七時でしたよ」

「その代り、お晝は晝寝なすつてらしやつたでせう」

駿作は妙な愛想笑をした。彼女は靜に駿作の傍に腰を下した。

まぶしいやうに、駿作は眼を伏せて盆地を見やつた。涼しい月の光があたり一面にふりそゞがれて、燒野が廣々と見渡された。遙に地獄に呻る轟音と、松に騒ぐ風の音とが、緩やかなリズムを刻んで迭交りに聞えてくるのであつた。公會堂からはのかに流れて來る美しい樂音は、そのかうした自然の嚴な伴奏を縫うて、清亮な月の光と交響した。そして絶ては續く嫋々たる餘韻が、廣い高原の丘々を夢のやうに煙らせてゐた。二人はしんとあつた。駿作の心は不思議な此自然の音樂の魅力の恍惚とした世界へ連れて行かれてゐた。

「涼しうございますネ……下はどんなに暑いこととせう。こちらに來る時なんか、小濱で九十度以上もあつたんですもの。」

彼女の口は輕やかにすべる。

「あなたの學校、高等學校なんでせう？随分面白いでせうね」

女一人にさへ祿に口の利けぬ自分が、高等學校の生徒と云はれると、彼は妙に恥しいやうな氣がした。

「なに、面白いこともありません。遊んでばつかしです」

「K——市でせう。いつでしたかしらん……さう、去年でしたわ、わたしね、K——市で一度、舞台に立つたことありますの」

駿作は蘇みかへつたやうに急に頭を上げた。

「さうですか？何の時です？」

「あの、新劇協會——御存知でせう、東條鐵石さんの——あの時「法難」をやつた折なんですよ」

「さうだつたのですか、僕も見たんですが……あなたもおるでだつたのですか」

「私ね、あの時は端役で、御殿女中の役でしたの。とてもお分りありません。男優だつたら馬の足ですものね」

かういつて彼女は笑つた。それとともに、今迄緊張し切つてゐた自分の心がだん／＼緩んでゆくやうに思はれて、駿作はやつと落付いて來た。

「失禮ですが、何だつて女優になられたんですか」

「何つてね、別に理由はなかつたのですが……私の好奇心もあつたのでせう」

啣んではき出すやうな彼女の聲には、寧ろ或淋しさが籠つてゐた。

「しかし、女學校まで出られて……」

「いゝね、女學校なんてつまりません……かうしてゐてもやつぱりつまりませんけど……私のやうな人間は何したつて、つまらない氣ばかりされますの……」

彼女の聲が急に沈んで來た。ふだんあれほど快活な彼女の態度が、急にかうまで變つたので、駿作はびつくりした。そしてあはて、彼女の顔をすかし見た。

「つまらないつて、それや誰にでもあることですよ。あなたばかりでもないでせう……とても人間は自分で満足される時はないやうです。あせつたつて仕方がないんですもの、私なんか比較的のんきに構へてゐる方ですが、アハ……」

「……………」

力のない空虚な自分の笑聲に駿作もおかしかつた。彼女は笑はうともしない。團扇を口にあて、うなだれた彼女の姿が、ほんのり闇に浮いて、そのいぢらしさに駿作は抱いてでもやりたいやうに思つた。

「わたしでも、女學校を出る迄それや幸福だつたのですの。今でも思出すと、あの頃のことを悲しい程懐しいのですもの。いくら思出すまいとしても、一人ぼつちになると直ぐ昔のことが思出されて……かへつて、かうして女優なんかして、皆と舞台上で笑つてゐる方が私には樂な時があるのですよ。とても、とても、一人でゐると私、死んでもしまひたくなつて……」

彼女はじつと唇を噛んでゐる。闇の中にはつきり見ぬけれども、かすかな涙が頬に光つてゐる。公會堂で起る歡聲が小さい木靈を伴うて又響いて來る。彼と彼女との間には、身動きのならないやうな嚴肅な沈黙が支配してゐた。

彼女のかうした態度が、あまりに唐突であつたのと、それは前にも云つた通り、彼女と自分との間に、何かしら通れられない運命のひつかかりといったやうな、目に見えない、氣味の悪い厭なものが動きかけつ、あるやうな氣がして、此上彼女に打とけて行くことが駿作には恐ろしいやうに思へたのである。何故そんな氣がするのか、駿作は自分の彼女に對する不思議な氣持を訝つても見た。けれどもそれは、自分でもはつきり了解することが出来なかつた。唯、さういふ漠然とした不安を、心の上から消すことが出来なかつた。と云つて全然此場の空氣をひつくり返して、陽氣に彼女を慰めてやることも駿作には出来なかつた。ついで知らず／＼彼も亦彼女の淋しい氣分に引入れられて行くのをはつきり知つた。

「なに、淋しいことなんかあるもんですか。あなたのやうに云つてはきりがありません。公會堂にでも行つて見ませうか」

立ちかけた駿作を嘆願するやうに彼女は引留めた。

「何時からか、あなたに聞いて頂きたかつたんですけど……私、打明くる人もなくて自分一人泣いてますの……」

問はず語りに、かうして彼女は自分の身の上を話し出した。駿作は、折から昇つた十日余りの弦月に照らされた女の顔を此上もなく清いものに眺めながら、靜に團扇で足を拂つてゐた。

× × × × × ×

彼女は長崎で生れた。山の手の居留地に近い或町に住んでゐて、父は裁判所の書記を勤めてゐた。しかし町には二三軒の貸家も持つてゐて、彼女と妹とを女學校に送つても大して苦しくない程の餘裕はあつたらしい

母が熱心なクリスチャンであつたため、寧ろ自分でも進んで、ミツシヨンスクールミッションスクールの華水に入つた。長袖の着物を衣て、軽く靴を踏みながら女學校に通つてゐた彼女の頃の生活は、又とない幸福が惠まれてゐたのだ。

朝陽が靜に昇ると、浦上に聳れた天主堂の鐘がゆるやかに搖れるのである。

ゴーン……………

長い餘韻を引いた鐘の音に、今長崎の町々は眠から醒むるのである。そして仰げば蒼穹は一點の曇もなく青々と澄んでゐる。外海に續く港に、一羽二羽の鷗が中空に舞ふ。

ゴーン……………

太陽の光がゆらくとゆらく。山、丘、家、それらがちようど繪のやうに點綴されてゐる。しかも教會に鳴る鐘の音が、これらの繪のやうな景色に對して比ぶべくもあらぬ伴奏の役をつとむる。これらの纏つた土地全体の雰圍氣が誰の心にも平和な、ヒムリツシユな落付いた氣分を與へてくれる。

小さやかな丘の上に立つ小さい修道院も今眠から覺むる。美しい小鳥たちは敬虔な面持をしてバイブルをかいて抱いて講堂に入る。靜にゆれる朝の空氣の中に、彼女たちの口から嚴かな朝の祈りが唱へられるのである。つねならぬスヰートな歡びがワナ／＼と顫へるやうに彼女たちの心の深みに湛わられる。

陽は又山に沈んで行く。赤い灯が波に瞬く頃、ミルク色した夜の幕が靜かに／＼長崎の町を抱擁する。回想はなつかしい昔にかへらう。

黒い衣を衣た若い牧師が、しつかりと銀の十字架を抱いて空を見やつてゐる。鐘が鳴る。コーラスの聲がゆれて来る。いつか若い牧師の瞳には、遙な故國を偲ぶ涙が泌みる。長崎の町は今、日が暮れるのである。夕の鐘に又彼女たちの小さい祈は始まるであらう。そして安らげき一日の幸を神にどれ丈感謝したことであらう。かうして小さい丘の上の修道院は朝の鐘に醒め、夕の鐘に眠つてゆく。それはまことにクララのサンダミアノの寺院にも思はるゝ平和と安息の温い巢であつた。

彼女は十七の春、普通科を出ると更に英文科に進んだ。そして又二年の幸福な女學校の生活が惠まれた。しかも彼女には燃ゆるやうな求道の心が湧いてゐた。強ひて英文科に入つたのも、只平和なマリアの愛に抱かれて祈禱と讚美歌とに浸つてゐたかつたからであつた。

しかし此小鳥もその巢を離れる日は來た。彼女にはこの慈母の懷から出てゆくことが、まるで掴み所のない海の中に投げ込まれるやうに思はれてならなかつた。

學校を出ると遊んでゐてもつまらぬし、少しでも嫁入の費用が多いやうにといふやらかな母の考へで、彼女は三菱のタイプライターとなつた。それは彼女が十九の五月であつた。

今迄の敬虔な静な生活から抜け出て、かうした慣れない職業に、彼女は並々ならぬ苦勞を味はなければならなかつた。しかし母になだめられると、云ひたい不平も口に出し得なかつた。

彼女の同僚にNといふ同年の女がゐた。彼女の友と云つては此Nだけであつたのである。そして彼女が二十の正月にNに招かれて歌留多會に行つた。そしてそこで福岡といふ三菱の若い技師と合つた。

二三日たつと、突然福岡から先夜の詫を云つて、おひまなら遊びにお出で下さいと云つて寄越した。今迄嚴格な修道院で暮した彼女には、福岡は初めて接した若い美しい異性であつた。短いもせよ、かうした手紙を貰ふことは彼女には全くの驚異でもあり、喜びでもあつた。そして今迄抑へてゐた、彼女の内のある力強い感情がぬつと頭を擡げて來た。

Nと一諸に福岡を尋ねたのが初りで、日曜の來る度に彼女は、後では一人で、彼を訪ねてゐた。

彼女には戀が信仰と一にさへ思はれるやうになつて來た。キリストに祈つてゐた彼女の手は福岡のために合掌された。キリストを讃へたその唇から福岡のために主の厚き恵を乞うた。

彼等の行く道はあまりに明である。二人の間の事が同僚の口の端に上り、引いて彼女は職を免じられた。それと知つた母の怒りと又悲みはひどかつた。父は毎日苦い顔して一言も口を利かなかつた。一家が彼女故に冷たい暗い空氣に包まれたと知つた彼女は一日として家にゐることは出來なかつた。彼女は戀人の許に走つた。

しかし戀人は昔、生死を誓つた戀人ではなかつた。自分の今の薄給では、今俄に妻を持つてもどうともすることが出來ぬこと、今暫らく待つてくれれば必ず兩親にも納得さして引取るなどと、義理一片の挨拶で彼女を突放すやうに歸らしてしまつたのである。今漸く女といふ者が如何に弱いものかといふことを知り、之と同時に今迄の誇りと理想とが一時に暗黒のドン底に陥つてしまつた心持がした彼女は、不面目を恥づる悲しみと、誇りをすつる口惜しさと、男の無情を恨む心が一時に錯雜して、捨鉢的になつた彼女は遂に女優となつてしまつたのである。



「だから、わたし、もうもう、男なんて信じ切れませんの。一生獨身でと覺悟して、かうして女優になつたんですけど、一年も立たぬ中にかういふリユーマチスに罹るなんて……私ほんとに呪はれてるのね。でも矢張り時々はあるの人のこと思出しますのよ。女で、情ないものね。踏みにじられても擲られても、やつぱし昔の戀人のこと思出すなんて……あ、あ、考へれば考へる程つまらない」

今までうなだれて聞いてゐた駿作は、彼女より黙り込んでしまつた。彼女の痛々しい過去の追憶が、彼の觸れてはならぬ胸の疵に障つたのだ。

男が眞劍なのか、女が眞劍なのか、駿作には譯が分らなくなつた。

彼をふりすて、富と地位とに走つて行つた女のことと思出された。此にかうしてお互に充たされぬ愛の空虚を抱いて立つてゐる二人の人間が駿作には只普通一様の事には考へられなかつた。彼も亦泣きたくなつて來た。

「誰だつて……誰だつて同じです。悲みは自分一人のものじゃありません。私共は徒らな過去の追憶に泣いてゐることよりも、幸ある未來を祈ることが、もつと、もつと大切な事です。ね……泣くのはおよしなさい。そしてもう遅いから歸りませう」

優しく云ふ彼の聲に促がされたやうに、彼女は更に咽び泣いた。

「さあ、お立ちなさい。よくあなたのお心は私にも分るやうな氣がします。泣いたつて仕様がありませんもの」

かういつて彼女の肩をゆすぶつた駿作は先に立つて丘を下り初めた。涙を拭いて身繕ひをすると彼女も亦ス

タスタ後からついて来た。

中天に懸つた月の光が晝のやうに明るく道を照らしてゐる。

「あの、横尾さん……」

彼女はつと立寄つた。

「何？」

「今夜のこと、叔母さんにも云はないやうにしてね……そしてあの、私を妹のやうに思つて下さいね……私一人では淋しくて生きてゆかれないのですもの……」

かういつた彼女はもう彼とすれどすれどに歩いてゐた。厚化粧した白粉の香ど、女に特有な匂どが、息の詰まるやうに鼻をつく。駿作の身体がワナ／＼顛へた。

「横尾さん！可愛想と思つてね、いつ／＼までも見捨てないでね」

彼女はしつかり彼の手を握つた。一瞬間、駿作の頭はグラグラとしてよろめいた。今迄歩いてゐた平坦な途が碎けてしまつた。彼は口も利けなかつた。今迄と打つて變つた劇しい嫌惡に、彼は胸を突かれたやうによろめくと、ありたけの力をこめて彼女を突放した。

一目散に宿に歸つた駿作は、のべてあつた薄團にもぐり込んだ。苦しいまでの高い胸の鼓動が一つ一つ手にとるやうに聞ける。

叔母と従弟たちの歸りもよく覺わてゐた。駿作ははち切れさうな頭をかゝへて夜晩くまで眠れなかつた。

その翌日、たう／＼女と顔を合はす機会がなかつた。又駿作の方で成可く女と會ふ機会を外してゐた。

今更あんな女にひつかうてどうなるものかと思ふ一方、このまゝ打すて、おくのが又となく可哀想なことのやうに思はれた。女が確實に參つてしまつたと思ふと、或一種の優越感を覺わると同時に、まるで今迄と違つた氣分が生ずるのに驚いた。彼には彼女が一の謎であつた。謎であつたからこそ興味もあつた。あんな荒んだ生活をして、數ある男とも朝夕接して來た女が、よもや彼のやうな殺風景な男に戀するなどといふことは、美しいロマンチックな詩の口にくそ考へられたものゝ、決して現實には考へられなかつた。しかも彼の或場合の行爲は明に彼女の小さい媚を買ふためになされたことすらあつた。引曳られるやうに彼は彼女の内に求め入つてゐた。又さうした境遇から彼女を救つてやることに、何かしらんへロイックな義侠心といつたやうなものが、よく彼の心に湧いてゐたものだ。そして遂に彼女の心を確實に掴んだと知つた時に、彼は彼にもはや何の興味も湧かせなかつた。それどころか、てんでこれまで頭に入れてなかつた彼女の容貌、氣質、育ちなぞが、彼を捨てた女のそれと比べて、比較にもならぬ程あつてゐることが、今はつきりと分つて、寧ろ嫌惡の情さへむら／＼湧いて來るのであつた。

山も俺には何の平和も與へてくれなかつたと思つた。駿作はもう三十日も過して來た此山の生活には殆んど執着は殘らなかつた。それに休暇も残り少なくなつてゐたことでもあり、思切つて叔母と相談して豫定より五日早く、八月二十五日に山を下ることになつた。

最後の五日間彼はよく牧場に行つた。彼女はそれからといふものは、彼に會つてもめつたに口も利かなかつた。又急に變つた白々しい彼女の素振りを見て、欺されたと思つた駿作は打のめしてもやりたいやうな腹立

しさを覺けた。

山に別るゝ最後の日が来た。

朝早く用意の馬車が二台宿の前に着いた。

「長々とお世話になりました……」

叔母は宿のお神さんにいろ／＼と此迄の禮を述べた。従弟と三人で行李の荷造をしてゐた彼の耳許に

「もう、御用意は出来て……」

彼女のハイテルな聲がした。

「あゝ、やつと出来ました」

駿作は今迄の嫌惡を一時に忘れたやうに、急に晴々しい顔を上げた。

「ほんとにあたにもお世話になりました。どうぞお序の節は私の方にお運びにゐらして下さい。窮屈な所です……」

叔母は愛想よく彼女に挨拶した。

「わね、ほんとによかつたら上らしてお貰ひしますわ、私も何だつたら二三日の中に立ちませう、病氣も少しはいゝし……もう皆さんお立ちだつたら、とても一人で暮せませんもの」

彼女は一人取残される淋しさに泣出しさうである。荷物が多かつたゝめ、前の一台に叔母と俊夫が乗ると、駿作と佑二は後の一台に乗ることになつた。玄關に下り立つた彼女は、一番最後になつた駿作に近づいて、

誰にも悟られぬ中にすばやく囁いた。

「あのことを忘れて頂戴ね。そしてほんとに、いつまでも交際して下さい、私も舞台はよしてズーツと長崎に  
ゐますから……」

「承知しました。あなたも御氣嫌よう」

駿作は彼女の顔を見まいとするやうにつと後の車に入り込んだ。

馬車が静かに動き出す。よろづやのバルコニーの人たちは又こちらを眺めてゐた。彼女はその邊まで送つてくるといつて、叔母の止めるのも聞かず、馬車の傍から尾いて來た。通りすがりの異人さんたちが、今迄にない懐しい表情を浮べて見送つてくれた。馬車はもと來た道を又下つて行く。白い路が山腹を緩に下に續いてゐた。

「あー、何もかもこれで勘定済みだー」

駿作はほつとした。青い田の盆地に入る頃、馬車は止つて、叔母は改めて又挨拶を交はした。彼女はもうハンカチを眼にあててゐた。

「さようなら」

「さようなら……」

馬車は動き出した。

彼は尙ハンカチを眼にあてたまふ、身動きもせず立つてゐる。

彼女の姿がだん／＼小さくなつてゆく時、駭作の悲みはだん／＼増して來てどうにも仕様がなかつた。馬車  
が盆地を抜けて彼女の姿が全く見なくなつた時、あらゆる感情が一時にこみ上げて來た彼は、願をそむけ  
て泣いた。

(一九三二、一、卅一)